

シベリア抑留と私

静岡県 宮代 武雄

大東亜共栄圏の名のもとに軍主導で我が国が危険な方向に日ごとにエスカレートし突き進んでいた最中の時代、私は昭和十五（一九四〇）年徴兵（満二十歳）で甲種合格となり、翌十六年には現役兵として当時次々と新設（軍拡）されていた部隊の一つであった電信第七連隊に入隊が決定した。場所は満州国（日本が政治的に創った統治国）の北東にあたる当時の東安省、東安というところ、現在の地図で見ると中華民国の黒竜江省のようである。そして十六年一月末、忘れもしない大勢の近親者、友人等に軍歌と万歳の騒然たる中、千人針を腹に巻き発車ギリギリに沼津駅プラットホームから数人に抱えられ客車の窓へ押し込まれ郷里を後にした。このときから軍国日本兵

の一員として、いや応なしの人生が始まったのである。

まず大阪第八連隊に集合、身体検査（不合格者は即日帰郷）のあと、軍服その他、兵としての軍装一揃えが手渡され、一泊して翌朝大阪港から関門海峡を抜けて遠く離れていく祖国の島々を後に玄界灘から大連港に上陸、貨物列車に乗せられて目的地、東安までノークツションの中で正に貨物同様に運ばれた。

そして日本がとめどなく続いた中国との交戦の中、ついに真珠湾攻撃から未曾有の第二次大戦に突入、敗戦の屈辱を味わいながらソ連の捕虜となり、昭和二十四年シベリアから帰還するという、夢にも想像できない事実が私を待っていたのである。

私は先ごろ地域の囲碁友達の岩崎さんから全抑協の話聞き、その趣旨に共鳴して入会した者ですが、早速支部長さんから「記憶の許す範囲でいから抑留体験を書いてもらえないか」との依頼

を受けましたので、生来健忘症の自分ですから正確度は定かでなく、地名とか違ったところもあるうかと思いますが、想いのままにペンを走らせてみます。

まず前述の電七に現役兵として入隊（電信隊に入ったのは、それまで地方にいたとき職場が郵便局で通信の仕事をしていたためと思う）。一期の検閲を過ぎてから約半年後、連隊本部付となり、経理官志願を頼まれ近くの関東軍五軍司令部での試験の結果これにパス、以来経理下士官（兵長〜伍長）となった。

そのころ南方戦線も振るわず戦況不利の影響を受けて軍の移動が激しくなり、たまたま私は急遽あわただしく新設の航空第六大隊（満州第六百二十三部隊）の経理担当官として同隊に転属を命ぜられ、東安から単身編成地の公主嶺（南満州に当たる）に赴任、同部隊所属となった。

部隊は所定の訓練を実施して、十八年十月ころ新任務であるソ満鮮国境に位置する羅新港（朝

鮮）にあつて内地向け食糧の発地であるこの港の防衛のため高射砲部隊とタイアップして航空機と戦う目的をもって同地に陣取ったが、終戦間際ソ連が参戦。地上掃射、空爆が激しくなり、敵機の撃墜も見たが、間もなく半信半疑のまま日本の敗戦を耳にし、それから部隊は同地を引き揚げ、いわゆる転進作戦をとり、一路元山方面に向かって南下した。途中、日本海からか、激しい艦砲射撃と空からの地上掃射を受け、何度か危険にさらされながらどうやら着いたところは羅南の小学校、一息する間もなく原地人の先導でソ連軍戦車が数台侵入し、ここで最後の抵抗かと思つたが指揮官の命令で白旗を掲げ、武装解除となり、ついにソ連の捕虜となった。

それからはアフタマー（七十二連発のマンドリンと呼ばれた自動小銃）を肩にしたソ連兵監視の下に、当てのない行軍を何十キロと強いられ、その間、持ち物の時計、万年筆等の略奪もあつた。そうこうして結局次に羅南港にたどり着いた

が、ここが国内最後の場所、数日後、半貨物船に乗せられ約三百人の戦友たちとともに出港。ソ連人から「行先はヤポンのアオモリ」と教えられ、これをまともに信じて喜び勇んで船倉でおかゆまがいのものを食べながら翌朝を待った。

ところがどっこい問屋が卸さなかつた。着いた所は秋の肌寒い草原の中の見慣れない寂しい港、おりてみたら道行く人は青い目の人ばかり、明らかに異国（そのころのナホトカ港）であつた。だまされたのである。

そして今度は大型トラック（アメリカ製のジープ）に乗せられ、陸続と連なる車上でどこまで行くのか、未知と不安が同居する異様な気持ちだつたが、仲間が一緒なのがせめてもの救いだつた。お先真っ暗な中で半日くらい走つたあと大通りから脇道に入つてからしばらくすると大草原のかなたに鉄柵と見える囲いの中にトラックまがいの建物が見えてきた。ああ、あそこに入るのかと頭をよぎつたのが正しくそのとおりとなつた。

数日を経過し班の編成人員（数百人）も決まり、強制労働が始まつたのである。

労働の内容

体の強弱により区分され、上位から鉱山作業、伐採作業、農作業、収容所内の雑役、このほかに別枠で収容所の炊事班と床屋があつた。そしてこれらは体力が低下するにつれて順次繰り下げられる方法がとられていた。

なお、私の入所した収容所（ラーゲルと呼ばれるもの）は、カワレルワ地区のシーヘナンチアと記憶している。最初に従事したのは鉛の鉱山で、作業はこんなものであつた。事務所で作業衣をまとい、抜け道のない坑内にトロツコを線路に乗つて押し進み、二百メートル程度（奥に続く）入ると木製の七十〜八十センチの蓋が足元から一メートルくらいの高さの側面に、ある間隔を置いて幾つもあつて、その足下にトロツコをとめ、その蓋を横に引くと上から鉱石（ダイナマイトで破壊さ

れた大小さまざまな大きさの鉛の鉱脈まじりの石がたまって（いる）がドーンとなだれ落ちてくる瞬間、トロッコがいつぱいになるタイミングを見て蓋を立てて落ちる鉱石を止めるのである。もちろん下に落ちて線路がふさがった石は脇にまとめ、今度はこの重い鉱石を積んだトロッコを坑外へ運び出すのだが、奥から外へは少々曲がりくねりがあり、この坂道（レール）を下って出なければならぬ。

途中勾配がかなりあるのでスピードが加速され危険を伴うが、ブレーキも無いので履いている登山靴まがいの重いゴツイ靴で車輪を押さえスピード調整をしつつ転覆しないよう搬出する。出てきた所は鉄パイプを張った上で、ここにトロッコの取っ手を持ってひっくり返すと鉱石が下に落ちる（下をのぞくと大きな鉱石のたまり場となっていて、これはさらにトラックが来て精練所に運ばれる）。

このときロシア人の女従業員がいて運び出した

回数をチェックしている。これを何回も繰り返して、一日の作業終了後、トータル回数によりすべての作業について規定されているノルマにより当日の成果が測定報告される仕組みである。なれてくるとこの従業員（ニーナというこの若い娘の面影が今でも目に浮かぶ）と仲良しになり、回数を上積みしたこともあった。

鉱山では私のような小柄でなく上背のあるパワーの持ち主は切り羽でダイナマイト爆破作業をやっていた。また、事務所の入口にはスターリン五カ年計画の下、大きな赤い布地の旗が（右肩に白くくつきりとハンマーと鎌がマークされた歌そのものに労働者、農民のシンボルとして）掲げられ、スターリンの肖像写真も必ずあり、こんな風景が収容所その他至る所で見られた。

有無を言わせない独裁者による圧政が徹底されていて、恐ろしい極みであった（裏には秘密警察の目が光っている）。

一方、思想犯としてこの地方に送り込まれてい

た住民（一緒に仕事をした人々）が脅えるようにヒソヒソと日本人の私たちにも反政府への思いを語る傍ら、早期帰国できるよう励ましてくれた。

食事の内容

体のことも忘れて夢中で働いている中、失望と空腹にさいなまれ次第に体力を落としていった。ただ一つ頼みとなる食べ物と言えばこれがまた想像もできないもので、朝食はアメリカ製の缶詰の空き缶にコウリヤンのうすい「かゆ」一杯。昼食はニシンの塩漬け一匹と黒パン（もみ殻の混じったお粗末なもの）一切れ、しかも夕食は各人自分の労働量のノルマ達成率により三ランクに区分された応分の量で、オートミールまがいの（穀物と羊の肉少々が混じった）ものが与えられるだけという極めて残酷なやり方が続き、体力は見る見るうちに衰え、そのまま回復できず死者を出すという悲惨な状況であった。

私の記憶ではこの最初の半年ばかりの期間が一

番問題であったように思う。その後は自分も体力が低下し、一ランク下がった伐採作業に移ったが、このころ仲間の中であちらこちらから食糧の差別待遇について、このままでは死を待つばかりだ、何とか改善しなくてはの叫びが沸き上がり、ともあれ質とともに全員に対し同量支給することを収容所長（ロシア側）に直訴した。

そもそも収容所全体では全作業員のノルマ達成率によって支給全量が決められるので、それを平等に配給すればよいことで、それによって作業に精励でき成果も上がるとの約束であった。

結果としてこれが認められ実現したため、以後我々同志（同志とは共産党員の合い言葉で、党员養成のテキストで初めて覚えた仲間の意味）が結束し元気で祖国に復帰を誓い合ったのである。

そして、第二の作業となった伐採とは、鉾山のものとは全く違った屋外作業で、広大なシベリアの山中（原始林）にあつてカラマツとかシラカバを切り出すのである。

詳しくは、まず数人でグループを作り、立木の状態を見て切る木を選定し、二人で鋸を引き（こちらでは二人で引くというより押しっこする）、林立する木々の枝が引つかからないような方向に倒し、倒した後は枝を払い頭部（裏と言う）を切り、およそ十メートルく十五メートルとして、これを木株の間を縫うように運び出す一連の作業である。運悪くこのころは長い長い冬季であつて、気温は毎日マイナス二〇度前後、たき火をするにも空気が凍る中では新聞紙等では火が付かない。こんなときシラカバの皮をはがしてたきつけにするのが一番良かったのを思い出す。ノルマは切り出した木の裏の直径と元の直径を測りそれぞれの面積を出し、これに長さを加味して体積を算出するというもの。要するに大きい木に対して小さい木は楽に本数は上がっても体積が上がらない欠点があるので、どの程度の木がノルマに対して一番効率かは馴れが必要となる。

この作業の冬季では雪が深く足下が悪いので最

も苦勞するのは搬出である（運び出していくからである、運び出さなければ成果は出ない）。初めは一本一本運んだが、山を下ったり上ったりではちが明かないので、そりを作つて数本一度に運び出すこともやつたが、そりを作る時間とか修理する時間も八時間労働の中でやらなければならぬので、それだけ本来の仕事量ができないことも当然ながら考えなければならぬので、グループはまちまちの方法で働いた。

ソ連邦の代名詞「働かざる者は食うべからず」を嫌というほど味わされたのはこのころで、何でもやらなければならぬのか誰も教えてくれない。ただ側について尻をたたかれなかつたのがせめてもの救い（引率してくるソ連兵は銃を持ちながら終日木陰で休んでいるだけ、作業を指示したのは民間人で、余りうるさくなかった）。ここでも鉱山作業の友とは入れ代わつたが「祖国へ帰ろう」の合い言葉の下に慰め励まし合えたので、この難儀を頑張り通せたのだと痛感する。

そして、ここまで来ると精神力が第一と信じながらも、今もって自分がここに元気でいる五体を眺めて、この体でよくぞ生き長らえてこられたものと、亡き両親に感謝するとともに、犠牲となつた同志の冥福を祈りたい心境である。

最後に私の就労したのと言えば、鉱山と伐採作業を二年ほどした後、電柱の穴掘り、集団農場（コルホーズ）におけるジャガイモの拾集、さらには体力も最低まで落ち込みラーゲル内の雑役等もやる身となつたが、それらの印象は弱い。

なお、ラーゲル内の仕事るときは赤い思想のテキスト（マルクス、レーニン主義と弁証法的史的唯物論）を読まされ、作業隊の朝の出発時にアジテーションをやらされたことも記憶として残っている。

捕虜に対して不法に強制された労働について記述したが、その他日常をめぐる環境（家屋、トイレ、風呂等）は最悪であつたが詳細は省略する。

シラミに悩まされたこと等衛生的にも苦しんだが、生きるためには何と言つても食う事が第一で、寄れば食う話である。食える物は何でも口にする、雑草はもとより、山兔、ネズミ、蛇、猫、今思えばぞつとするようなげてものもいとわなかつた。人間究極は食欲であり、そして精神力も欠かせない要素であることも経験した。

日本帝国主義を打倒するためには手段を選ばなかつた（不可侵条約破棄）ソ連も、次に来るべき米ソの対立と筋書きどおりに進み、ついにはソ連の崩壊、東西ドイツの併合と歴史は繰り返されたが、今なお争いの絶えない人間欲に言葉がない。私自身も昭和二十四年九月末、その年最後の帰還船（遠州丸）にぎりぎり間で間に合い、夢に見た舞鶴港に上陸となつた。

そして幸い出征前の職場に復職しシベリアぼけた自分にむちうって頑張り、おかげで現在は年金生活を送っているが、恐ろしいもので、あれだけ苦勞した事も長い年月の間にすっかり精神的に

マインドコントロールされ、子供や孫に囲まれて平凡に暮らしている。

終わりに一言申し上げます。

全抑協に入会して早速持ち上がっているシベリア抑留者慰霊碑の建立が敷地も決まったのを知り、ぜひともこれが実現し、「平和の礎」として永くこの地にあつて我が国の前途が正しい方向に榮え、さらには本日終戦の日を迎える中で世界が平和になるよう見守つて下さることを願つて信条の一端といたしたい。

シベリア抑留と闘病生活

愛知県 糸井紀伊

一、出生から入隊

大正十(一九二一)年一月二十一日 和歌山県
田辺市にて出生

父は水産物加工業が主たる職業 三男三女の二男

二、ソ連軍侵攻前

昭和二十(一九四五)年六月二十九日、朝鮮・京城(ソウル)・龍山駅前集合。たくさんの幟や見送り人の中に友人の樋上さんの奥さんが小さい子供さんを背に、心尽くしの弁当を持つて来てくれたのには感激した。

飛行機工場に動員されていた時の彼女がお守りを入れて、その中には万葉集の

今日よりは 省みなくて 大君の

しこの御楯と 出でたつ我は
と書いてあつたが、私は

千万の 戦なりとも 言挙げせず

取りて来ぬべき 男の子とぞ思う

の方が良いと決意を伝えた。

羅南に向かう列車が貨物列車だったので驚いた。しかし狭いながらも寝て行けるのでかえって